

学生にとって卒業研究の意義

特別支援教育講座 長尾秀夫

I. 授業形態と規模

卒業研究は 20 年以上にわたって、教育支援の実践研究を行っている。受講学生は卒業研究発表会と卒業研究発表会のレジメ、卒業研究論文などを参考に、研究室訪問なども経て、学生達自身が研究室を決定している。したがって、卒業研究の年間スケジュールや研究の概要は理解している。

私の研究室では、卒業研究の目的を優れた教育実践者(学校教員を中心に)を育てることにおき、一人の学生が一人以上の対象者を通年で支援し、何らかの成果を挙げることを目指している。学生達の興味関心は尊重しているが、特別に強い希望がなければ、学校等の子どもで保護者から支援の希望がある対象者を提案し、学生の同意を得て対象者を決定している。特に最近は通常の学校にいる対象児に対する支援を行っている。

学生は週 2-3 回学校へ行って通常の学級での支援と放課後の個別支援を行い、支援の成果を毎回記録する。それを研究室のカンファレンスで発表して、次回の支援の発展・改善の方向の提案を得て、学生が次回の具体的支援について計画を立てる。この PDCA サイクルで支援を行っている。

この授業は卒業研究を実践し、その方向付けに重要であることはいうまでもない。大学外にいる対象児との関係や保護者、担任、学校等との関係など、対象児にかかわるあらゆる問題を話し合い、問題解決の場ともなっている。

授業はゼミ形式で、毎週 1 回月曜日の 17:00~18:30 の間に通年で行った。本年度の受講学生は 4 人であった。後半の 30 分は特別支援教育研究科在籍の現職教員 2 人のカンファレンスと合同で行い、彼らに現場の教員の考え方をコメントしてもらった。

II. 学生の受講姿勢

学生は 4 人と少なく、毎回、発表と討論に一人当たり 20 分程度の時間が割り振られていた。学生は、毎回の実践の内容、工夫した教材、子ども等とのコミュニケーション記録をまとめてカンファレンス参加者全員に資料を配布して成果と課題を報告した。

学生は自分の実践を報告することに集中していたので、討論を促すために教員は共通の問題があると考えた学生に話を振る必要があった。ときどきは、自分の実践だけでなく、他者の実践を聞いてわが事として理解できるようになって欲しいと話した。授業を繰り返す中で、後半には他の学生の実践にもいろいろと意見を述べるができるようになった。

教員採用試験終了後には学生の時間的余裕ができてきたので、それぞれの学生の実践・研究を過去の論文や著書と比較検討する課題を出した。そして、先行研究と異なる部分を見つけ、何か新しい試みに取り組むことを提案した。

この授業の中で、学生には先行研究にどのようなものがあり、自分の実践の何が新しい取り組みとなっているかを分析してもらった。学生は文献検索を行って、具体的な実践研究が少ないことを知り、日々の実践の積み重ねをできる限り客観的に記録し、書き留めることの必要性を理解したとの発言があった。

III. 教員の授業運営

授業のシラバスには、授業の目的として、地域の小中学校で特別支援教育対象児の支援を行う、参与観察の基で対象児の支援方法、学級全体の支援方法、教員の活動を学ぶこととなっている。この目的は、通常の小学校に学生を派遣することで達成できた。

授業の到達目標として、1. 特別な支援を必要としている子どもの実態を知り、具体的に説明することができる、2. 特別な支援が必要な子ども、

その他の学級の子どもに対し、学級担任の支援方法を参考にして実践できる、3. 子どもや教員とかわり、協調して働くことを学ぶ、を挙げていた。これらの3つの目標もこの授業の中での学生の発表、卒業論文の中に成果を見ることができる。

ディプロマポリシーに関わる項目として、1. 教育活動に取り組むため、高い技能と豊かな表現力を身につけている(技能・表現)、2. 自己の学習課題を明確にし、理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる(関心・意欲)、の2点がある。教員側からの視点では、1年間の実践で学生は自らの力を十分に発揮し、この授業を核としたPDCAサイクルで主体的な学習を行い、成果を挙げたと考える。学生の評価は次の項で述べる。

卒業研究の省察の授業であるが、前期は学生達の教員採用の準備を優先して、教員は検索や理解に多くの時間を必要とする課題を控えた。また、学生が対象児をありのままに自分の目で見ること、先入観を持たないことを大切にして、自分で子どもを理解し、自分に何ができるかを考える機会とした。夏休みからは、保護者の願いも伝えて、個別学習を通して支援の方向性を学生と共に絞込み、先行研究について広く検索して実践に取り入れ、新しい取り組みを行った。

IV. 学生の授業評価とその考察

授業評価は通常の5段階(5はそう思う、4はややそう思う、3はどちらともいえない、2はあまりそう思わない、1はそう思わない)で無記名により行った。1. 教員の話し方はわかりやすかった?に対して、5が1人、4が3人であった。教員はいつもの早口と話が飛ぶことが多かったのかもしれない。2. 授業の構成・展開はよかった?に対して、5が4人で満足していた。3. 授業の内容・レベルは自分にとって適当であった?に対して、5が3人、4が1人であった。前半の模索の時期が1人の学生には不安があったようだ。4. 教育媒体(スライド、ビデオ、DVD)が有効に使われていた?に対して、4が1人、3が3人であった。授業は学生の報告が柱となっており、教員は時に著書や文献を紹介したり、最近の研究をスライドで示すだけであった。今後は、もう少し意識的に最先端の研究を紹介したい。5. プリント等の教材が適当に使用されていた?に対して、5が3人、3が1人であった。これは教員からの資料が少なかつたとする者がいたことを示し、学生の資料は毎回必ずあった。6. この授業で新しい知識・概念・支援法が身についた?に対して、

5が4人で全員が授業の目的を達成していた。7. グループ討論は意見交換に有効であった?に対して、5が4人でこれも全員が満足していた。8. 自分のコミュニケーション記録は支援の記録に役立った?に対して、5が3人、3が1人であった。研究のまとめに子どもとのかかわりよりも子どもの成果が中心となった者の意見かもしれない。これには、教育支援の工夫について、成果の示し方をもう少し指導する必要があったのであろう。9. 同僚のコミュニケーション記録から支援の様子がわかった?に対して、5が3人、4が1人であった。これも上記の問題と同じ課題が残った。10. 授業は教育支援に役立つ内容であった?に対して、5が4人であった。11. 授業は自分にとって満足いくものであった?に対しても5が4人であった。以上から、ほぼ授業の到達目標は達成できていた。

もう一つの評価である「学生によるDPと対応づけた授業評価調査」について学生の意見を自由記述から抜粋する。DP1の知識・理解については、広汎性発達障害、極低出生体重などの子どもを具体的に理解できた。DP2の思考・判断では学校での子どもの様子、グループ討論等で障害がある子どもの実際を知ることができた。DP3の技能・表現については、学校で自分の考えた支援を行なって、多くの成果を挙げることもできた。また、研究室のカンファレンスでヒントをもらうことも支援の工夫をするのに有意義であった。DP4の関心・意欲については、1回生からの体験を卒論研究で生かし、PDCAサイクルを実践して成果を挙げることもできた。DP5の態度については、学校に毎週行くことで、子どもとのかかわりの楽しさを知り、担任の先生や校長先生たちとも話しをして、教員としての態度を学んだ。以上の自由記述があった。評価は全項目一律で、対応していたが3人、どちらかといえば対応していたが1人であった。

V. 受講環境、施設・設備

教室はICT教育研究室で行ない、教室の大きさや設備も十分であった。ただ研究室であったので、他の研究室の活動に迷惑とならないような時間設定が必要と考える。